

音に耳をすませて

酒井^{さかい}
星野高等学校

郁^{あや}
三年

「ねえ聞いた？ 三組の釣島君、ピアノやめるんだって。」

退屈な授業が終わり、眠気でボーっとしていた頭が、「釣島」「ピアノ」という単語で一気に覚める。

「ねえ！ ねえ！ 今、なんて？」

椅子を倒す勢いで立ち上がり、声の主を逃がすまいと彼女の制服の裾を引っ張った。

急に大声で呼び止められて驚いた彼女——亀田さんは、クラス一の情報通だ。担任や生徒の噂話、学校の行事、そういったもの全ての発信源は大抵この人である。

「あー！ 由梨恵、何やってんの！」

私の行動で何となく察したのか、親友の木口絵里が、さっきの私の声に負けないくらいの大声でツカツカと歩み寄ってきた。私を思いっきり亀田さんから引き離す。

「ごめんね、この子条件反射で動くような子だから。」

「事実でしょー！」

お互い睨み合うが、これもいつものこと。絵里とはもう付き合いが長く、私の対応にも慣れてるから。

「えっと……それで、鈴原さんは、さっきの話を聞きたいんだよね？」

脱線した話を、亀田さんが元に戻した。

「そう！ ピアノの話。」

私がピョンピョン跳びはねながら言うと、絵里は、またかと溜め息を吐いた。

「ああ、釣島君の話ね。そのままよ。もうピアノやめちゃうんだって。」

「え！ それ本当？」

何も知らずに来た絵里は、釣島君の音楽の成績話かと思ったらしく、再び大声を上げる。

隣のクラスの釣島君は、容姿端麗、成績優秀、おまけに音楽も出来るという所謂完璧男子だ。女子からの人気も圧倒的に高く、ファンクラブがあるとかないとかっていう噂まであるほど。

その中でも、特に彼が弾くピアノは、学年どころか学校中に広まるくらい有名な話だ。伴奏のオーディションを受ければ必ず合格し、音楽の先生をも魅了するとても心地よい弾き方をする。もちろん、私も彼のピアノを聞いたことがある。伴奏なのに、まるでピアノが歌っているよう、で、違和感なく耳にスルリと入ってくる演奏だった。

彼自身も、小さい頃からずっとやってきていたと言って

いたはずなのに……。

「うん、本当よ。もう遊びでも弾かないらうじよ。」

遊びでも弾かないということは、本当にピアノに関わる全てをやめてしまおうじよ。

ピアノ経験者が、レッスンをやめた後に気休めや遊び程度で弾くことはよくあると聞いたことがある。それを聞くと私は、そんなに好きなら、何故ピアノのレッスンをやめてしまったんだらう？ と疑問に思った。

それすらしなくなってしまうなんて、彼に何かあったのだらうか？

「でも、どうして急に？ 彼、最近も賞とか獲っていたよね？」

それは、私も聞いた。確か全国のコンクールで、結構上の方の賞を獲っていた気がする。賞の名前は長くて忘れただけ。

そんな凄い賞を最近も獲っていて、挫折したって訳でもなさそうなのに、なんで突然やめるなんて言い出したんだらう？

「それがさー、直接本人に何人か聞いたらしいんだけど、頑なに教えてくれなかったらしいの。まあ、彼が好きな子は、

その理由を言わないところがカッコイイみたいなこと言ってたけどや。」

なにそれ。いや、彼が好きな子云々はさておき、理由を誰にも言わないって、それにも理由があるのかな？

だって、有名な規模が校内だ。下手な理由でやめたら、がっかりする人や批判する人だっているかもしれないし、彼の今後の学校生活にも関わってきそう。だから、敢えて理由を隠したのかもしれない。

でも、彼に憧れを持っている人っていうのはたくさんいて、私もそのうちの一人だ。彼の弾くピアノは、私が生まれて初めて聞いたピアノだった。その時、私もこんな風に人の気持ちを動かせるようなピアノを弾いてみたいと思って、ピアノを習い始めたのだ。私以外にも、彼に憧れてピアノを始めた人は何人もいる。そんな憧れの人が、ピアノをいきなりやめてしまったとなれば、それだけで批判が来てもおかしくない。

「でもさー、正直言って、なんでそんなに彼にピアノをやめて欲しくないんだらう？」

絵里の言葉に、私は思わず首を傾げた。

なんでって、そんなの決まっている。皆、彼のピアノが

好きだからだ。彼の才能を喉から手が出るほど欲しがっている人だって何人もいるのに、その才能を捨てるのはもったいない。

「木口さんは、彼がピアノをやめてもいいの？」

「いや、そういうわけじゃないけど。赤の他人がどうしようも、別に私たちに関係ない話じゃない？」

言われてみれば、確かに……。向こうは、私たちの名前どころか顔も知らない。

「釣島君のピアノは確かにすごいよ。でも、やめたからなんなの？ それは彼の事情であって、私たちには関係ない話。釣島君がピアノをやめたかったんだから、それについて他の人が口出しするのは違うでしょ？」

絵里の言っていることは、筋が通っていた。

確かにピアノを弾かないことはもったいないとは思いつけど、彼が何の考えもなしにピアノをやめたとは考えにくいし、それを聞きたい人の我が儘で無理矢理弾かせるっていうのも違う。

「そうだね。木口さんの言う通り、私たちには関係ない話だし、もう終わりにしようか。鈴原さんは、残念そうだけど。」

「そりゃ残念だよ。彼のピアノ、いつも自分が弾く時のお

手本にしてたし、CD出たら買って毎日聞きたいくらい好きだもん。」

「分かった、分かった。」

口を尖らせる私を、絵里が半分呆れたような顔で宥める。

「亀田さん、ありがとね。」

絵里は亀田さんに会釈すると、私の手を掴んで席に戻る。

気付いたら、もう次の授業が始まる一分前だ。いつも休み時間中は寝ているから、久しぶりに有意義な時間になった。

でも、やっぱり憧れの人がピアノをやめてしまうことは、私にとってはショックなことで、授業にはさっぱり身が入らなかった。

絵里は関係ないって言ったけど、やはり気になってしまったもので、それをずっと考えていたのだ。

理由——怪我だろうか？ 運動部によくある話だけど、

怪我をしたからやめるっていうのが格好悪くて隠したっていう可能性もある。でも、流石にピアノをやめないといけないくらいの怪我なら、誰か知っていそうだし、生活に支障をきたしそうだからすぐに気付かれそう。それに、怪我なら遊びですらピアノを弾かないってこと、ないと思うんだよね。ピアノが好きで毎日弾いていれば、その習慣が根

付いているから簡単にやめるなんて出来なぞぞうだ。

怪我ではないとすると、他には何だろう……？ 勉強との両立が大変だからかな？ でもいつもテストの成績は上位に必ず食い込んでいるし、テスト前も切羽詰まっているような顔は見たことがない。私が見ていないだけだろうか？ 考えれば考えるほど気になって、先生の声なんて全然入ってこない。結局、釣島君がピアノをやめてしまった理由は、見当もつかなかった。

夕日でオレンジ色に染まった、放課後の音楽室。

この学校では、昼休みと放課後に二部屋ある音楽室と音楽準備室を解放していて、誰でもピアノが弾けるようになっている。釣島君の影響で、この学校のピアノのレベルが高くなってから、皆少しでも上手くなるために学校でも練習する人が増えたからだ。そのため、昼休みはいつも、音楽室前ではピアノ争奪戦が始まる。でも、放課後は皆、塾や習い事、部活があるから練習する人はほとんどいない。

私はいつも、部活が休みの日のあまり人がいない放課後にピアノを弾いている。そのせいもあって、私がピアノを弾けることを知っている人は少ない。でも、それでいいんだ。

だって、上手くはないんだもの。

釣島君のピアノを知ったのは一年前だが、それでももっと幼少期から習っていた人から比べたら、月とすっぽんの差だ。それに加え、私は呑み込みが悪いから、習い始めて一年経っているとはいえ、未だに両手では簡単な曲しか弾けない。

でも、自分には自分のペースがあると思って、特に焦りもせず、のほほんと弾いている。だから、誰かに聞かせられるような上手さはまだないのだ。

ピアノを前にして座ると、自分がまるで指揮者になったかのような気分になる。どの音を出すのかも、どんな曲調を奏でるのかも、全ては私で決まる。

楽器はいつだって従順で素直だ。奏者に対して反抗することもひねくれることもない。しかし、逆に言えば、演奏の全てが奏者で決まるということだ。奏者の本音が、楽器に表れるのだから。

指で軽く鍵盤を押さえると、調律されて綺麗に整った音が音楽室に響く。ピアノは、極端な音量調節や音を変えることが出来ないけど、力の加減で表現の仕方が変わるから、そこに面白味があって私は好きだった。

「いい音色だね。」

両手で簡単な練習曲を弾いていると、ピアノの音に混じって声が聞こえた。

まずい、誰かに自分のピアノを聞かれた！

そう思って辺りを見回すと、一人の男子生徒が音楽室のドアから顔を覗かせていた。しかし、その顔を見て、私は思わず□をあんぐりと開いてしまった。

それは、あの釣島君だったから。

「あ、もしかして俺のこと知ってる？ まあ、あれだけ騒がれてたら流石に知ってるか……。」

あ、そうか。私は彼のことを知っているけど、向こうからしたら初対面なんだ。

「え、えっと……二年二組の鈴原由梨恵です。」

「うん、知ってるよ。」

釣島君の声に、再び私は思考停止に陥った。

今、なんて？ 知ってる？ 私のことを？

「……知ってるの？」

「知ってる、知ってる。二組の鈴原さんでしょ。俺の話をしていると、大抵寄ってくる人って聞いたことあるからさ。」

周りからそんなふうに使われていたんだ、私……。

確かに釣島君の話になると、亀田さんと話した時みたいにあまり知らない子でも話しかけにいつてしまう。彼のこうと、もっと知りたいから。

でも、本人にまでそういうふうに使われていると恥ずかしいな。

釣島君は、私と隣にあるピアノを交互に見た。

「もしかして、鈴原さんもピアノよく弾くの？」

貴方のピアノに憧れて始めました！ なんてことは言えず、私は静かに頷いた。流石にそれは本人の前じゃ恥ずかしい。

「そっか。」

返ってきたのは独り言のような小さな声だった。

このままでは会話が終わってしまう。彼は鞆を肩にかけているし、その気になればいつでも帰ることが出来る。

でも、私はもっと話したい。せつかく憧れの人と話せる機会が出来たんだ。このまま終わりにたくない。

「あ、あのさ、釣島君。」

もうこうなったら、見切り発車だ。取り敢えず、何でもいから話して、少しでも時間を稼ごう。

「何？」

「あのね……な、なんでさ、ピアノやめるって言ったの？」

そう言った途端、音楽室の空気が少し冷えた気がした。

ああ、私は馬鹿だ。なんでよりもよってこの質問したんだろう？ 他の人が聞いても教えてくれなかったんだ。今日初めて話した私に教えてくれるわけがないのに。

「も、もしかして、怪我とかなのかなーって思ってた。」

このままでと嫌われると思って、慌てて言葉を繋いだ。これなら、怪我だったらって心配しているように思われると思っただから。

彼が嫌悪な反応をしているところを見たくないのです、顔を見ないように少し顔を伏せていると、フッフと彼が声をもらした。

「あ、ごめん。馬鹿にしたとかそういうことじゃなくてさ、怪我だと思っている人がいるとは思わなくて。でも、怪我じゃないんだ。それなら、もう誰かが気付いているよ。」

釣島君は、慌てて顔の前で手を振った。

そうだよな。怪我なら流石に誰か気付く。彼を見ている人は、たくさんいるんだから。

でも、それより彼が嫌な顔をしなかったというくらい、少なからず安堵した。初めて話したその日に嫌われるとい

う、酷な事態は避けられた。

「あ、そう言えば練習していたんだよな、ピアノ。邪魔したごめん。俺、もう行くから。」

壁にかかっている時計をチラリと見て、彼は片手をあげて謝った。

「べ、別に大丈夫だけど……。」

私からしたら、釣島君と話せたことだけでも嬉しいから。むしろ私が、彼に失礼なことを言ってしまったし、ピアノを練習していたことも忘れかけていた。

「じゃあな。ピアノ頑張れよ。」

「あ、あのさ！」
向けられた背中に向かって、私は無意識のうちに声を出してた。彼の足が止まる。

「も、もしよかったですらでいいんだけど、ピアノ教えてくれない？」

無意識に出た言葉だけど、私の本心だった。

私がピアノを習い始めたのは、釣島君の影響だ。憧れの人からピアノを教えてもらえたら、これほど嬉しいことはないだろう。

しかし、彼はこちらを振り向くことなく、

「ごめん。俺、人に教えるの得意じゃないんだ。それに、今はちょっとピアノから離れていたいからさ。弾きたくないんだ。それじゃな。」

今度こそ帰ってしまった。

告白したわけでもないのに、直球で振られたような虚しさ、私は思わず溜め息を吐いた。

やっぱり、駄目だったか。いや、逆に断られた方が良かったのかもしれない。

釣島君からピアノを教わりたい人なんて、校内にたくさんいるはずだ。自分だけ教わっていることが他の人に漏れたら、今まで彼の話で一緒に盛り上がっていた人も敵に回してしまう。

それに、釣島君、ピアノから離れていたいって言った。やっぱり、ピアノを弾かないのには、理由があるんだ。

でも、怪我ではないとすると、理由は何だろう？ 絵里は関係ないって言っていたけど、やっぱり気になってしまう。

……駄目だ。考えていたら、今日の授業の時みたいに、集中力を切らしてしまう。

しかし、それでも思考というものは止まらないもので、ピアノを弾いても細かいミスばかり繰り返して、全然集中

出来ない。

今日はもう練習にならないな。私は、ピアノの脚の隣に置いていた鞆を掴むと、ピアノの蓋を閉めて音楽室を後にした。

こんなことくらいで練習に集中出来ないなんて、まだまだだな。

集中力のない自分に半分呆れながら廊下を歩いていると、目の前を光が一筋照らしていた。その光を辿ると、電気がついた教室のドアが少し開いていた。

どうやら、まだ教室に誰か残っているらしい。

「ねえ、知ってる？ 今年、釣島君を越える天才ピアノ少年が現れたんだって。」

教室から漏れた微かな声に、私の足が止まった。

「嘘でしょ！ だって、釣島君も充分凄いのに。」

「ううん、それがそうでもないみたい。この間のコンクールも、釣島君が獲った賞って確かに凄いんだけど、その天才ピアノ少年は、最優秀賞だったみたいよ。釣島君は、上位には入ったけど、そこまで高くないって聞いた。」

「そうなんだ。やっぱり、全国区となると上には上がいるのね。」

「一度有名になっちゃうと大変だよね。」

「ねー。」と皆が共感した声を上げ、そこで会話が終わった。そんなことがあったんだ。初めて聞いたことだったけど、全国区で上位に入るだけでも凄いことだし、それを聞いたところで釣島君に対する憧れは変わらない。

でも、釣島君はどうだろう？ やっぱ悔しいよね。

もしかしたら、ピアノをやめてしまった原因はそのコンクールの賞のせい？ でも、それくらいですっと続けてきたピアノをやめてしまうだろうか？

新しい情報が入ってくるたびに、釣島君がピアノをやめた理由が分からなくなってくる。好きだったものをやめるって相当な理由があるはずだし、自分が関係ないことも分かっているけど、私がピアノを始めるきっかけになった人だから、考えることをやめられなかった。

それから一週間が経った。

釣島君がピアノをやめた理由について話す人は大分減った。もう皆、それとなく受け止めているみたいだった。

でも、私の気持ちは晴れない。ずっとモヤモヤしていた。釣島君のピアノから離れたいという言葉と、教室から聞

こえたコンクールの出来事。それが関係してないとは言い切れない。

事実、コンクールが終わった後に、釣島君はピアノをやめているから。

やっぱ、本人に聞くのが一番だ。

でも、人気者というのは忙しいもので、休み時間はともじやないけど彼には近づけない。私以外にも、彼に近づいて少しでも話したい人なんてたくさんいるわけで、その中に割って入ってピアノの話をほじくり返したら、私はずだの空気が読めない奴だ。元々、初対面の時から既に、彼の地雷を踏みそうなことばかりしているのだ。これ以上、下手なことをして、彼に嫌われたくはない。

今日も何も進展しないまま、私は音楽室に向かった。

すると、いつもは聞こえないはずのピアノの音色が聞こえてきた。

ついに放課後にもピアノ争奪戦が始まるのか？

そう思って、慌てて音楽室のドアを開けると、ちょうどピアノを弾いている男子生徒が目に入った。

彼が釣島君だと分かる前に、ピアノの音が先に頭に入ってきた。

去年の合唱祭で聞いたやわらかな音色。でも、その音色には少し角があるように感じた。弾き方は同じはずなのに、あの時のような大きな感動はなかった。音楽室だからだろうか？

彼が最後の一音まで丁寧に弾き終わった後の教室は、ピアノの音色の余韻だけが残っていた。でも、どこか濁ったような響きに、私は拍手することも忘れて彼を見ていた。

釣島君は、ピアノから離れていたいって言っていた。それなのに、今ピアノを弾いている。一体、どうして……？

私の頬みを断る口実だったのだろうか？ でも、あの時は本当に弾きたくなさそうにしていた。それとも、彼がピアノを弾かないってということ自体、嘘だったのだろうか？

頭が混乱してきて、彼の行動が全く分からない。

そして、弾き終わった彼と目が合った。彼は、少し驚いたように目を見開く。聞かれていたことには気付かなかっただけだ。

キーと床が擦れる音がして、釣島君が足で椅子を押して立ち上がった。

「今……俺のピアノ聞いてた？」

少し掠れたような声に、私は本当のことを言っべきか戸

惑いつつも頷いた。

「……どうだった！」

前のめりに私を見つめる彼は、真剣な顔だった。嘘をついて誤魔化しているようには見えない。

「えっと……よ、良かったよ。」

取り敢えず、ありきたりで単純な感想を口にする。

じっと見つめられたことなんて日常じゃほとんどないから、逆に直視出来なくて目を逸らしてしまう。そこから逃げてしまいたい衝動に駆られた。

「もっと具体的に！ どこが良かった？」

……逃げられなかった。

この状況から脱したいあまり、単純なことを言っただけでまず話を終わりにしようとしていた。でも、それが出来なくなると今、彼に何か言わなければいけない。言葉が全然出てこないのに。

「本当に正直な気持ちでいいよ。なるべく、いいところよりも悪いところを言って欲しいけど。」

いいところよりも悪いところか……。

「音程とか弾き方とかは、去年聞いた合唱祭の伴奏と同じでとても良かった。でも、なんだろう……。具体的に何が

駄目とかは言えないけど、ピアノの音が濁っているように聞こえた。前みたいに、澄んだ綺麗な音じゃなかった……と思う。」

そう言うと、彼は一気に脱力してしまった。

悪いことを言ってしまったのだらうか？ よくよく考えてみれば、全国レベルのピアノの演奏に、素人に近い私が口を出すのも本当なら恐れ多いことだ。またしても、彼に嫌われるようなことを……。

「やっぱり、駄目なんだ。」

力のない小さな声を、私は聞き逃さなかった。

とても落ち込んだ言い方に、彼が言ってくれと言ったのにも関わらず自分の言葉に罪悪感を感じてしまう。

「ごめん、素人に近い私がいると……。」

「いや、そうじゃないんだ。」

力なく首を振った彼に、私は口を開けたまま再び固まった。

「ごめん。急に聞いて一人で落ち込んで。あ、もしかして、ピアノの練習に来てた？ それなら、俺もう帰るから使っていないよ。ごめん、変なことしちゃって。」

彼は、慌てて鞆を掴む。焦ったように帰ろうとする彼の肩を、私はすれ違いざまに掴んだ。

「待ってよ。」

彼の足が止まる。

「なんでピアノ弾いてたの？ この間は弾きたくないって言うってたのに。」

「弾きたくないとは言っていない。ただ、ピアノと距離を置きたかっただけで……。」

いつもの余裕な表情とは一変して、今はクラスにいる弱虫一匹狼系男子のように、小さく縮こまっているように見えた。

「でも、今日は弾いてた。もうピアノと距離を置かなくても大丈夫ってことでしょ？ それなら、私にピアノ教えてよ。」

これはチャンスだ。人の弱味につけこむように悪いけど、今までずっと彼のピアノのことは気になっていた。やっぱり彼からピアノを教わってみたい。今度こそ、絶対チャンス逃さない。

「だから、それは出来ないって言っただろ。俺は人に教えるって柄じゃないんだって。ピアノだって、今はまだ……。」

「まだ……何？」

言葉を濁した釣島君に、私は容赦なく聞き返す。

しかし、彼は黙ったままだった。

「ねえ、釣島君。もういいんじゃない？ ピアノ関係で何かあったんでしょ？ だからピアノを弾かなくなったんじゃないの？」

「……お前には関係ないだろ。」

聞いたことのない低い声に、私はたじろいだ。

そうだ、私は彼がピアノを弾かなくなったことと関係ない。それで何かを得るわけでも失うわけでもない。ついでの間初めて話したばかりであり、部外者だ。

この間絵里が言っていた釣島君とは関係ないってことも、釣島君が言っていることも正しい。

でも——

「なら、そんな悲しそうな顔して、ピアノを弾かないでよ！ 悲しい顔している人を放っておけるわけない。」

何があったのかは知らないけど、現実から逃げて辛いままピアノを弾いていたって、聞いている人も楽しくない。どんなに音程が合っていても、強弱がついていても、奏者の感情は音色に表れる。だから、楽器は素直で従順なんだ。

釣島君は、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をして固まって

いた。

しかし、その顔はすぐに崩れ、小さく乾いた笑い声を漏らす。

「悲しそうな顔か……。全然自覚なかったよ。」

知らない間に顔に出ていたんだ。やっぱり、ピアノ関係で何かあったんだ。もしかしてこの間のコンクールの話かな？

「鈴原さんはさ、なんでピアノを習い始めたの？」

突然聞かれた質問に、私は少しびっくりしながらも考える。私がピアノを習い始めた理由……それは、釣島君に憧れたからだ。でも、今釣島君のピアノを聞いて、それだけじゃないことに気付いた。

「聞いた人を、笑顔にするような演奏がしたいと思ったから。」

ピアノじゃなくても良かったかもしれない。でも、私が実際感動して笑顔になったのは、釣島君のピアノだったから。だから、ピアノが良かった。ピアノじゃなきゃ駄目だと思った。

「珍しいね。俺が言うのもあれだけど、この学校にいる人たちは皆、俺みたいに人気者になりたいからとか、有名に

なりたいたからとかばかりなのに。」

ああ、そうか。だから皆、人が多い昼休みにピアノを練習するんだ。ほとんどの生徒が帰った放課後と比べたら、昼休みは校内の人が聞いてくれる。上手かったら褒めてもらえる。それを狙っていたのか。

でも、それが釣島君がピアノを弾かなくなったことと関係があるのだろうか？

「知ってるかもしれないけど、俺はこの間全国のコンクールに出たんだ。でも、結果はそこまで良くなかった。いや、端から見たら良かったのかもしれない。賞は獲れたからだけど、上位ってほど上位でもなかったんだ。とても悔しかった。」

そうか、あの時教室で話していたことが原因だったんだ。

「それで、結果発表まで終わった後、最優秀賞を獲った人と話す機会があったんだけど、その時に聞かれたんだ。『君にとって音楽は何？』ってね。」「

自分にとっての音楽……？

「俺は答えられなかった。ピアノが自分にとってどんなものなのか、あまり考えたことがなかったんだ。ただ、上をずっと目指していた。賞を獲って皆から褒められるたび、もっ

と上を目指せって言われているみたいで、皆を失望させたくなって、ひたすら練習していたんだ。だから、自分がピアノに対してどう思っているか、ピアノをやめたら分かるんじゃないかと思った。でも、結局やめても、答えは出なかった。多分、俺にとってはそれだけのものなんだよ。ピアノは。」

力無く笑いながら話す釣島君は、コンクールからずっと悩んでいたのだろう。

釣島君がピアノを弾けなくなった根本的な原因は、実力をつけるためだけにピアノを弾いていたからなんだ。そして、周りも実力だけで彼を判断していた。

釣島君に憧れていた人も、話すことはコンクールで賞を獲ったとか、合唱祭で彼のおかげで優勝したとか、彼の実力のことが多かった。

確かに、実力を上げて好成绩を残せば、自分の名前は世間に知れ渡る。それは、今の時代きつとどこでもそうだ。実力がなければ、誰にも見て貰えない。

でも、音楽はそういうものじゃないんだ。

「釣島君さ、ピアノを弾くことって好き？」

彼はすぐに答えを出さなかった。いや、出せなかった。

考えながら首を捻る彼に、私はもう一度質問をする。

「じゃあ、質問を変えるね。ピアノを弾いていて楽しい?」
「……どうだろう。ピアノを弾くのは習慣になっていたから嫌でも弾くし、成績が残せたらそれなりの達成感はあるから、楽しかったんじゃないかな?」

今度はすぐに答えただけで、答えになっていなかった。

ピアノが習慣になっているのは悪いことではないと思う。それは、私も一緒だから。でも、成績が残せたときの達成感、努力が実ったという喜びだ。楽しさではない。

釣島君のピアノは、勉強みたいだ。いい点数が獲れば喜び、次も頑張ろうと思える。でも、悪い点数を獲れば、勉強自体したくなくなってしまう。

「音楽ってさ、音に楽しいって書くでしょ? だから、やっぱり楽しめないという意味がないんだと思う。釣島君が今、こんなに悩んでいる理由は簡単。ただ単純に、ピアノを弾くことが楽しくないから。ピアノを弾いて楽しかったら、その最優秀賞を獲った子の質問にも答えられたはず。だから、何も考えずにピアノ弾いてみなよ。」

私は、釣島君を再びピアノの前に促した。彼はとまどいながらも、鞆を置いて椅子に座る。

彼の演奏が始まった。

一言で表せば、彼の演奏は「自由」だった。

実力、名声、そういった鎖に縛られていた彼の音楽が、今自由になって伸び伸びと広がっていく。彼の顔に、もう迷いはなかった。全身で自分の音楽を感じている。

私も、聞いていて清々しい気持ちになった。

澄んだピアノの音は、初めて私が彼のピアノを聞いたとき以上に私の心を大きく揺さぶったのだ。

これが、彼の音楽だ。

最後の一音を弾き終わったとき、透き通った音が音楽室の壁に吸い込まれて消えていった。

私は、知らぬ間に拍手をしていた。手が赤くなるのも厭わず、力一杯彼に手を叩いた。

彼はこちらを向いて、綺麗に一礼をするとやわらかく微笑んだ。

「なんか、分かった気がするよ。鈴原さんが言いたかったこと。音楽って、こんなに自由に弾けるものなんだな。俺は、間違った考え方で演奏していたんだ。」

実力がつけば、だんだん周りが見てくれるようになる。

でも、音楽の楽しさまで忘れて、それに固執してしまったり、きつとそのうち潰れてしまうんだ。

音を楽しむのが、音楽。弾いている人が楽しくなかったら、聞いている人だってきつと、楽しくないんだ。それは、楽器が素直で従順なことも関係してくることだろう。

「鈴原さん、ありがとう。俺、またピアノを続けるよ。さっき弾いて、今までで一番ピアノを弾くのが楽しかったんだ。最優秀賞を獲った子も、きつとこつという気持ちを大切に。ピアノを弾いているんだろっね。」

「うん、きつとそうだよ。」

私も微笑み返すと、彼は嬉しそうに再びピアノに向かった。その顔は、まるで無邪気な子どもみたいだった。

今日ももう、彼にピアノを譲ろう。他のピアノで弾くのもいいが、彼の本当の音色を、私の音色で重ねたくはなかった。今日は帰って、また明日からピアノを楽しもう。

弾くことに集中している彼にそつと目をやり、私は静かに音楽室の扉を閉めた。

学校を出るまで聞こえた彼の音色は、まるで歌っているようだった。

数日後――。

「ねえねえ、釣島君、ピアノまた始めたんだって?」

「そつなの! しかも、またコンクールに出たんだつてよ。」
今日も彼の噂は絶えない。

それもこれも、昨日行われたピアノコンクールが要因だ。釣島君が、最優秀賞に選ばれたらしい。全国区のコンクールではなかったが、周りで聞いていた人曰く、今までで一番いい演奏だったそう。

そして、そのコンクールを見て来たいた全国区で最優秀賞を獲った子が、釣島君にライバル宣言をしたんだとか。

釣島君は、自分の音楽で賞を獲ることが出来たんだ。きつと、彼も今までで一番嬉しかったに違いない。

無理に人気者や有名人を目指さなくなつていい。音楽はきつと、そういう下心があると響かない。心から楽しんで音を奏でる人には、きつと音楽が幸を運んでくれるかもしれない。

私もそれを信じて、音楽を奏でよう。あの時私の心を動かした、あのピアノを目指して。